

書評

五十嵐真子・三尾裕子編

『戦後台湾における〈日本〉 植民地経験の連続・変貌・利用』

東京 風響社 2006年

若林 正文

文化人類学者に止まらず、何らかの形で台湾を「フィールド」としている日本人研究者で、彼らに対する台湾人の親切の中で出会う「親日」に何らかのとまどいを覚えなかった人は稀であろう。そこからほとんどの研究者は、さらに台湾の中に見いだされる様々な「日本」に眼を向けざるを得なくなっていく。そうすると戦後台湾における「日本」が表出されたり、隠されたり、争われたりするコンテクストの複雑さに目がくらむ。とはいえ、自らが見聞きする台湾の中の「日本」とは何かを見据え、自身の「とまどい」の依って来る所以を自覚することは、台湾地域研究者、少なくとも日本人研究者にとっては、重要な与件である。このことは多くの研究者が知覚するに至っていたが、この課題に正面から取り組むこと、さらには学界のいわば「公共領域」でオープンに取り組まれることは稀であった。

本書は、そのようなオープンな、本格的取り組みの成果として、先駆的かつ貴重なものである。本書に至る最初の取り組みは、編者の一人三尾裕子が座長をつとめた2003年6月日本台湾学会第五回学術大会（関西大学）の分科会「抵抗でもなく服従でもなく：日本植民地統治期に対する歴史認識」であった。その後、このテーマを発展させるべく三尾が勤務する東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で二度にわたるワークショップが開催された。本書は、その二度目のワークショップ「台湾における『日本』」（2005年3月）の成果を収めたものである。最初のワークショップ「台湾における日本認識」の成果は、台湾省文献委員会の『台湾文献』（第55巻第3期、2004年）誌上の特集として中国語でまず発表され、日本語では本書の出版よりやや遅れて『アジア・アフリカ言語文化研究』第71号（2006年）誌上の特集¹として刊行された。本書の編者五十嵐真子と三尾の論考はこちらに収められている。

三尾によれば、最初の分科会に比して二度のワークショップでは、発表者が1990年代に台湾のフィールドに入った世代（90年代世代）から、三尾等80年代世代、さらにそれ以前の戦後のパイオニアの世代に広がり、さらに台湾の研究者との共同研究に広がってきた。また、発表者には入っていないが、第二回ワークショップでは、韓国朝鮮、太平洋地域など旧日本植民地だった地域を対象とする研究者をコメンテーターに招き、台湾研究を相対化すべく研究視野を広げたという。

このように、本書は文化人類学者を中心として、参加研究者の世代としてもディシプリンとしても（台湾の研究者は歴史研究者であった。政治研究者である書評子も第二回を傍聴した）広がりを得りながら、3年にわたって展開されてきた台湾地域研究の成果である。まず、内容紹介の一端として本書の目次を掲げておこう。

はじめに	五十嵐真子
日本統治時代と国民党統治時代に跨って生きた台湾人の日本観	蔡錦堂
元台湾人志願兵における「植民地経験」	宮崎聖子
二つの「日本」——客家民系を中心とする台湾人の「日本」意識	堀江俊一
植民地台湾における高等女学校生の「日本」	
——生活文化の変容に関する試論	植野弘子
台湾先住民アミの出稼ぎと日本語——遠洋漁業を例として	西村一之
自画像形成の道具としての「日本語」	
——台湾社会の「日本」を如何に考えるか	上水流久彦
戦後台湾抗日運動史の構築	
——羅福星の革命事績を中心に	何義麟
真宗大谷派台北別院の「戦後」	
——台湾における日本仏教へのイメージ形成に関する一考察	松金公正
戦後台湾における所謂塔式墓の系譜とその認識	
——無意識の中の「日本」のかたち	角南聡一郎
おわりに	三尾裕子

通常スタイルの書評としては、ここで、9本の論文について、逐一、ないしいくつかのグループに分けて、その論点の要約的介绍をしていくことになる。しかし、本書では、編者五十嵐の「はじめに」が要領よくそれを行っており、かつこれらの論文に対するコメントして当日のコメンテーターらの討論を整理して紹介している。当日のワークショップを傍聴していた一人として五十嵐の紹介とは別に紹介を書くのは甚だしい蛇足であると思われる。実は、上記の共同研究の経緯も、三尾の「おわりに」に周到に紹介されているのである²。

そこで、通常スタイルは放棄し、本書から触発された二三の感想を記すことで責めをふさぐこととしたい。書評子は、この三年ほど、東アジアの脱植民地化（したがって、日本植民帝国の「脱帝国化」）の観点から台湾現代史研究や戦後日台関係史の新たな研究視角が構築できないかと考え続けている。その問題意識からの感想である。

まず脳裏に去来するのは、本書が提供する知見は、ナショナリズム研究とどのように架橋され得るのだろうか、ということである。日本史学者の三谷博は、ある集団（の一部分の人々）が、自分たちとは出自や文化が異なると認識される他者を、忘れようとして忘れられない、否定しようとして否定しきれない、愛憎愛並び向かう「忘れ得ぬ他者」として捉え、その他者と並び立つものになりたいと願望したとき、ナショナリズムが生まれる、としている³。書評子は、台湾ナショナリズムの形成にとって日本と中国とがこの「忘れ得ぬ他者」であったのだと主張する論文⁴を書いたことがあるが、本書上水流論文は、ナショナル・アイデンティティーのレベルではそうだが、個人のレベルでは当てはまらない、「台湾の自画像の形成」において「日本」は選択肢の一つに過ぎない、としている（207頁）。この上水流の認識に見られるように、本書と本書に至る共同

研究の眼目は、ナショナリズムを扱うことによって直ちに研究者を襲ってくる視線の緊縛から逃れて、フィールドでの違和感の根源となった「親日」の様態とそのよって来るコンテクストを見つめようとするにある。近代途上の社会において心に「忘れ得ぬ他者」を抱くのは、まずは知識人である。その知識人のナショナリズムに緊縛された「知」が書き（描き）残したものに歴史学者の眼はまず注がれ、その「知」が獲得するヘゲモニーの様態に政治研究者の視線はまず注がれる。だが、常民への注視をディシプリンとする文化人類学者には、この緊縛をとりあえず「横に置いておく」のはそれほど困難でないらしい。自身のフィールドでの研究をそのまま投げ出した感のある論文も含んでいるが、本書では、台湾社会に現れる多様な「日本」が、台湾人がそれを「利用」する仕方の多様さも含めて、またその依って来たるコンテクストへの示唆に富む遡及も含めて、提出されている。その意味で本書は、文化人類学者が主導した台湾地域研究の成功例といえるだろう。

だが、当然ながら、だからといって、「抵抗でもなく服従でもなく」というレベルに視線を据えることができたからと言って、それで問題解決に巨歩を踏み出したと言うことにはならない（もとより、著者たちも一言もそういうことは言っていない）。著者たちの問題意識の端緒を語るのに「台湾（人）の『親日』」という表現を用いざるを得ないように、戦後の東アジアでは、「親日」－「反日」という語りのヘゲモニーが確立してしまっている。この語りのヘゲモニーはどのように形成されたのか、なぜそれは時とともに過去のものとなっていくのか、といった問題から、本書のテーマも最終的にはやはり逃れることはできない。日本植民帝国の脱植民地化は、軍事的政治的には、植民地宗主国の敗戦により、或る意味では「瞬時に」終了した。しかし、その負の遺産の克服を通じた旧植民地住民との新しい関係の構築という意味での脱植民地化は、戦後東アジアへの東西冷戦の波及とそのそれぞれの国内体制への刻印という状況下で、希釈され、遅延され、捻れている。そこで、例えば本書堀江論文が行っているように、フィールドで接した「親日」のコンテクストを過去へたぐっていくと、それは台湾人の「文明化」への意志と不可分であり、この面で植民地統治下であっても生活の諸側面で植民者日本人と対等に渡り合っていた台湾人の姿が目に入り、反射的に台湾人との競争に伍していけない「不甲斐ない」日本人の存在も浮かび上がってくるが、その台湾人の「文明化」への意志と憧憬が「親日」として現出したり捉えられたりする様態は、戦後の脱植民地化のあり方を抜きにしては説明が付かなくなる。「抵抗でもなく服従でもなく」というレベルに視線を据えて、台湾における「日本」の存在のニュアンスを描き出している本書の成果は、ひるがえって、日本植民帝国の脱植民地化の様態の解明というマクロの課題を、改めて照らし出しているように書評子には思われるのである。

最後に。十数年前、後に「日本語人」の代表格の人物として知られるようになった某氏と知り合い、その彼が披瀝する日本文化に関する蘊蓄に耳を傾けていたとき、この人に代表されるような世代の台湾人は、「敗戦のトラウマの無い日本人」なのだとふと感じた。逆に言えば、反省するにせよ反発するにせよ、「敗戦のトラウマ」の何かを何らかの形で背負い込んでいるのが、現代日本人なのであろう。であるとすれば、戦後台湾の「親日」とは、日本人研究者にとっては、戦後台湾における「日本」を感得する主体としての自分、つまりは現代日本人の形成、台湾の

フィールドに括弧付きの日本を感じた日本人の感性そのものが、戦後の希釈され遅延される日本植民帝国の脱植民地化との関連で、どのように形成されてきたのかという、戦後日本と東アジアへの眼差しによっても応答されねばならない問題と言える。それは、台湾人にとっての重要な「他者」が、植民地統治期においてさえ、「日本」のみに止まらなかった、まして戦後に於いておや、という本書の警告（正しい警告である）を服膺するということだけではすまないだろう。台湾研究の課題として言えば、敗戦後の日本がどのように脱帝国化し、戦後台湾との関係を切り結んだのか、という総体としての日本植民帝国の脱植民地化像構築へ向けての研究の構想、できれば日台共同の研究としての構想、が期待されるところであろう。

注

- 1 目次を掲げておく。三尾裕子「序」および「植民地下の『グレーゾーン』における『異質化の語り』の可能性」／上水流久彦「台湾の歴史の語り方」／松金公正「真宗大谷派による台湾布教の変遷」／五十嵐真子「佛光山からみる、台湾仏教と日本との関係」／西村一之「台湾東部における漁撈技術と『日本』」／黄智慧「台湾における『日本文化論』に見られる対日観」／林美容「宗主国の人間による植民地の風俗記録」
- 2 加えて、文化人類学者山路勝彦による本書の書評がある。山路勝彦「植民地統治下を生きた人々の『認同』を探る」（『東方』310号、2006年12月、25-27頁）
- 3 三谷博『明治維新とナショナリズム』、山川出版社、1997年、24-25頁。
- 4 「台湾ナショナリズムと『忘れ得ぬ他者』」、『思想』2004年1月号。